# コトノハツムギ…

陽光　ソリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コトノハツムギ…

【Ｎコード】
Ｎ１６７７Ｇ

【作者名】
陽光　ソリス

【あらすじ】
日常の何気ない会話から、頭に浮かんだコトノハを紡いでみました。詩集９編書いてあります。

## ～コトノハノユリカゴに包まれて…～

～涙の力を見付けた言の葉の揺り篭～

心の雲は気付かない間に幾重にも重なった見えない鎧を隠していた。

容赦なく吹き付ける冷たい北風から
あてもなく逃れるようにさまよい歩いた。

足がもつれて地面をじっと見つめた時
光に満ちあふれた陽だまりにコトノハノユリカゴを見付けた。

嬉しくてはにかみながら瞳から涙がとめどもなく流れ出した。
そのしょっぱいそして甘酸っぱい雫は心の雲をすっかり消し去り
鎧を錆び付かせて一枚一枚剥がしていった。

やっと自分の居場所が見付かった気がする。

暖かい優しい陽射しに包まれてコトノハノユリカゴにうずくまり
ようやく安堵の色を浮かべてそう思った。

このまま永遠に醒（冷）めませんように…

ナミダノチカラヲミツケタコトノハノユリカゴ
Ｔｈｅ　ｃｒａｄｌｅ　ｂｙ　ｌｅａｖｅｓ　ｏｆ　ｗｏｒｄｓ
ｆｏｕｎｄ　ｐｏｗｅｒ　ｏｆ　ｔｅａｒｓ.

～言の葉からの糸電話の糸の紡ぎ方～

言の葉を相手に押し付けて
自分は関与しない（関わろうとしない）人がいる。
板挟みになる人はたまったものではない。

イトデンワノイトみたいに
言の葉を相手に伝えれば
反論される（言い負かされる）し心が折れる。

その繰り返しでイトデンワノイトが切れた。
切れた糸電話は役目を果たさない。

糸を紐にして伝わらないようにするのか
必要に応じて糸を長くして
伝えたくないことは糸を緩ませ
伝いたいことは糸を伸ばして張る。

みんなイトデンワノイトだ。

甘い言の葉・辛い言の葉・嬉しい言の葉・哀しい言の葉…
前向きでも後ろ向きでも構わない。
それが自分なのだから。

それぞれを紡いで強いイトデンワノイトが出来上がる。

切れてもいいじゃないか焦らずに畏れずにゆっくり時間をかけてまた紡げは。

そうするとしなやかな伸縮自在のみんなと繋がる糸（線）になる。

そしてそれが形になってコトノハノユリカゴが出来上がるのだから。

コトノハカラノイトデンワノイトノツムギカタ
How to spin line of the thread telephone from leaves of words.

～解けた靴紐が教えてくれた道端の雑草達～

きつく靴紐を結んで窮屈ではないか。
そんなに急いで何を慌てているの。

前ばかり見ていると
気付かないことが沢山あるんだ。

ホドケタクツヒモは
どこにでも生えて青々と育つ
雑草の存在に気付かせてくれる。

決して鮮やかではないけれど
地味で目立たないほうが返って
大切で愛おしい存在を教えてくれる。

自分の存在を蔑ろにして心を無くし
相手のことばかり気を遣い
そろそろ疲れてきたんじゃないか。

ホドケタクツヒモは
それをちゃんとわかっている。

たまには靴を脱いで

コトノハノユリカゴに包まれて
優しいそして温かい言の葉を浴びながら
イトデンワノイトを紡ぎ直して
ゆっくりおやすみなさい。

ホドケタクツヒモガオシエテクレタミチバタノザッソウタチ

Ｔｈｅ　ｓｈｏｅｌａｃｅ　ｗｈｉｃｈ　ｃａｍｅ　ｌｏｏｓｅ
ｔａｕｇｈｔ　ｗｅｅｄｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｒｏａｄｓｉｄｅ．

以上が「コトノハノユリカゴ三部作」です。

## コトノハアソビ

以下が、単独詩集です。

～夢から覚めた日筏に乗っていた～

それは突然の出来事だった。

なにもかも順風満帆に事が運んでいると思ったんだ。

周りのことは気にしなで自己満足の世界に陶酔していた。

夢から覚めなければ自分のことを正当化し悪びれもなく万能な人間だと思っていた。

だけどユメカラサメタヒは僕には残酷な試練をかせてきた。

不安定なイカダで大海原を漂い現実という苛酷な事実を突き付けてきた。

どっちに漕いだほうがいいのだろう。辿りくつ島が見えない。

このままユメカラサメタヒが来なければいいと思ったのに。

漕ぎ棒を持つ手がかじかんできた。

限界までイカダを漕いだところで雲の隙間から一筋の光が僕を導き出した。

自惚れからは何も生まれない。

そう気付かせてくれたのは紛れも無い漂うイカダだった。

今、一筋の光を信じで大海原から地に足を付けて歩める陸地を探している。

前を向いて精一杯漕いで行こう。

そこには自分一人のイカダではない触れ合うことで本当の自分を見出だす希望を燈す島が待っているのだから。

いろんな人とのか関わりに怖じけづかないように自分を信じながら…

ユメカラサメタヒイカダニノッテイタ

Ｔｈｅ　ｄａｙ　ｗｈｅｎ　ｉｔ　ｃａｍｅ　ｏｕｔ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｄｒｅａｍ　ａｎｄ　ｎｏｔｉｃｅｄ　ｉｎ　ｗｈａｔ　ｓｔｅｐｐｅｄ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｒａｆｔ．

～○と×。ときどき△、またきて□。～

気付かずとも時には尖ってしまうことがある。

それで人の想いを傷付けてしまうことがある。

傷付け合ったらまあるくなるのかな。

大河の流れに沿って降りてきた石は

角が取れてまあるくなる。
なかなかそうにはなれないけれどまあるい自分を想像しよう。
そしてマルとバツ。
二つに分けられないから
時々サンカク、またきてシカク。
いろんな形はあるけれど
やっぱり安定しているマルがいい。
たまにはコロコロコロコロ転がって
気ままに過ごすのもいいではないか。
私とあなたのまあるい心。
マルトバツトキドキサンカクマタキテシカク
○ ａｎｄ ×.
Ｓｏｍｅｔｉｍｅｓ △ ａｎｄ ｔｈｅｎ □ ｃｏｍｅ ａｇａｉｎ.
～温室育ちの果物たち～
ぬくぬく育った果物は、寒さに弱い。

傷みやすく、劣化が進むのが早い。

だけど、甘さがしっかり詰まった果実は、みんなを喜ばせてくれる。

僕は、その一長一短の中でもがき苦しんでいる。

世間の風は、いよいよ冷たくなってきて、凍傷という痛手を負わせる。

かえって温かくすると、ミカンやリンゴみたいに寒さに強い果物も、傷みやすくなる。

生ぬるい自分の枠の中でしか物事を計れなくなると、自分が腐っていくようだ。

適度な寒さと適度な暖かさを交互に過ごすことによって、自分という果物はよりおいしく熟すことを学んだ。

まだ未熟な青い僕は、温室の中がすべての世界だと思っていた。

この世界から、一歩踏み出して、さまざまな果物たちに出会うだろ。

個性豊かな果物たちとの触れ合いは、キウイとバナナのように熟すのを手助けしてくれることもあるだろう。

みんな違う輝く個性を持っているのだから、助け合い慰めあって外気に負けないで、自分を甘くおいしく熟していこう。

オンシツソダチノクダモノタチ

Ｔｈｅ ｆｒｕｉｔ ｗｈｉｃｈ ｇｒｅｗ ｕｐ ｉｎ ａ ｇｒｅｅｎｈｏｕｓｅ．
（Ｏｖｅｒｐｒｏｔｅｃｔｅｄ ｆｒｕｉｔ．）

～いろいろな種から育つもの～

花の種は大切に育てないと芽が出ない。

水をやりすぎても、深く埋めすぎても双葉は芽を出さない。

だからこそ、愛おしく世話をすると可愛らしい芽を出してくれたときは、かけがえがなくうれしい。

愛情を注いだぶんだけ、ちゃんと応えてくれる。

種も良いものとは限らない。

ナヤミノタネ。

次から次へと、頭や心に種が涌いてくる。

この種はいつまでたってもきれいな花は咲かせない。

かえって増長すると、ややこしく自分をモヤモヤ雲にまいてくる。

種だからこそ、自分を成長させる糧に変えればいいのではないか。

ナヤミノタネを持っていない人なんていない。

それを自分の力で克服できたときに、人は強く美しくなれるのだ。

その種から新しい自分の美しい花を咲かせてみようではないか。

他人任せの他力本願では、種は種のまま。

自分の悩みを卑下して下を向いているのではなく、天高くお日さまの優しい光を浴びて、力を分けてもらって青々とした芽を育てよう。

そしてこの青空に咲かせてみよう夢の花。

イロイロナタネカラソダツモノ
Ｔｈｅ ｔｈｉｎｇ ｗｈｉｃｈ ｇｒｏｗｓ ｆｒｏｍ ｖａｒｉｏｕｓ ｓｅｅｄｓ.

～泣き虫な空の雨音の調べ歌～

晴れている日がいい。

お日さまの匂いが染み込んだ、ふかふか布団に包まれていると、幼かった日を思い出す。

無垢に笑いあった日を懐かしい。

大人になると作り笑いや愛想笑いを身につけ、本当の気持ちを抑えこもうとする。

知らず知らずに心に積み重なった、自分の本音に向きあう事なく、我慢しきれず涙雨がぽたぽたこぼれ落ちた。

雨の日は憂鬱。

くすんだ空は僕の心を知っているのか、やわらかいアマオトノシラベを旋律にのせて奏でてくれる。

晴れている日ばかりでは、渇いた心は潤せない。

たまには思いきり泣いて、虹を作ろうではないか。

その掛橋には、偽ることを捨てて、本当の自分を出せる道へとつながっているのだから。

ナキムシナソラノアマオトノシラベウタ

Ｔｈｅ ｓｏｎｇ ｏｆ ｔｈｅ ｍｅｌｏｄｙ ｏｆ ｔｈｅ ｓｏｕｎｄ ｏｆ ｒａｉｎ ｏｆ ｔｈｅ ｓｋｙ ｗｈｉｃｈ ｉｓ ａ ｃｒｙｂａｂｙ.

～ぽかぽかの笑顔ほころぶ桜色～

春風は強く吹く。

春嵐（シュンラン）と呼ぶにふさわしいような。

自分の中にあるわだかまりや腑に落ちないような世間の冬の寒さを吹き飛ばすかのように。

そして、強張んでいる顔も緩んでいった。

もうすぐ桜が咲く。

サクライロニホコロンダエガオは優しさに満ちている。

「幸せは自分の心で決める」とみつをさんは言っていた。

自分の幸福の杓子をほんの少し小さく持とう。

そして、ささやかな幸福を少しずつ積んでいこうではないか。

それはやがて、満開の桜のような暖かい色に染まっていく。

春心ーハルゴコロ、いつも持っていたいもの。

サクライロ＝ハルゴコロ

～ポカポカノエガオホコロブサクライロ～

Ｃｈｅｒｒｙ ｂｌｏｓｓｏｍ ｃｏｌｏｒｓ ＝ ｓｐｒｉｎｇ ｆｅｅｌｉｎｇｓ

Ｓｍｉｌｉｎｇ ｆａｃｅ ｏｆ ｎｉｃｅ ａｎｄ ｗａｒｍ ｍｅｌｔ ｉｎｔｏ ｃｈｅｒｒｙ ｂｌｏｓｓｏｍ ｃｏｌｏｒｓ.

## コトノハイロハ

～壁に手を。溝には足を。～

人と人とのかかわり合いは、難しい。
壁を作って自分を守り、それで溝が生まれてしまう。

高く厚くなった壁は自分では崩せない。
広く深くなった溝も自分では埋められない。

だからこそ無理をしないで道具を使おう。

道具と言っても、
壁にトンカチではすぐまた高い厚い壁ができるし、
溝にシャベルではすぐまた広い深い溝ができてしまう。

自分にとても労力をかせてしまう。
その繰り返しでは自分が疲れてしまう。

だからこそ、その度に、
壁には梯を掛けて自分の手で乗り越えればいいし、
溝には橋を架けて自分の足で渡ればいい。

時には壁も溝も円滑な人と人とのかかわりには欠かせない存在だ。

掛け梯＋架け橋＝カケハシゴ
自分を伝えるカケハシゴを持とう。

そうすることで、親しくなる道が開けるのだから。

自分の気持ちにウソをつかないで、できることから始めよう。
さあいまこそ、枷(かせ)を外して…

カベ＋ミゾ＝カセ
カベニテヲ。ミゾニハアシヲ。
ｆｏｒｔｒｅｓｓ＋ｇｕｌｆ＝ｓｈａｃｋｌｅｓ
Ｏｎ ｔｈｅ ｗａｌｌ ａ ｈａｎｄ． Ｉｎ ｔｈｅ ｄｉｔｃｈ ａ ｆｏｏｔ．

～人と為り、他人隣で、人と成り。～

人と為りは、本来自分が持っている性格。

わかりやすく言うと、人柄。

品と言った方がもっとわかりやすい。

気品、品格、品性、上品、下品、人品とも…

他人は、自分以外のヒトを指すときに使う言葉。

他人事≠タニンゴト。他人事＝ヒトゴト。

他人＝アダビトともいう。

その他人(ヒト)と初めてかかわることにより、自分の品が問われる。

資格＝他人とのかかわりの中で、自分が相手にふさわしくなる様。

始覚＝他人とのかかわりの中で、自分で迷いから悟りをひらく様。

死角＝他人とのかかわりの中で、自分の盲点に気付かされる様。

この三つのシカク（□）に気付いて品が成り立つ。

それで、自分が成長する。立派な人に成り得る。

ミッツノシカク

Ｔｈｒｅｅ　ｓｑｕａｒｅｓ

ヒトトナリ、ヒトトナリデ、ヒトトナリ。

Ｐｅｒｓｏｎａｌｉｔｙ　ｉｓ　ａｎｏｔｈｅｒ　ｐｅｒｓｏｎ
ｔｈｅ　ｎｅｘｔ－ｄｏｏｒ　ｎｅｉｇｈｂｏｒｈｏｏｄ　ｂｅｃ
ａｕｓｅ　ｏｆ　ｂｅｃｏｍｅ　ａ　ｐｅｒｓｏｎ.

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1677g/

---

コトノハツムギ…

2010年10月28日05時27分発行